

Title	生涯現役の生き方から学ぶ : 島尾忠男先生を偲ぶ
Author(s)	石川, 信克
Citation	目で見るWHO. 2022, 80, p. 30-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89360
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 生涯現役の生き方から学ぶ 島尾忠男先生を偲ぶ一



公益財団法人結核予防会代表理事

## 信克 石川

東大医学部卒後、ネパールでの活動経験より国際協力を志し、結核研 究所に入職。島尾先生より指導を受ける。日本キリスト教海外医療協 力会派遣医としてバングラデシュで医療協力に従事(1978-86)。結 核研究所国際協力部長、副所長、所長を経て2017年より同名誉所長。

国際保健のレジェンドであった島尾忠 男先生が 2021年3月28日、96歳の 生涯を閉じられました。先生は日本ばか りでなく世界の公衆衛生に貢献された逸 材で、世界中から先生の死を悼む声が寄 せられました。若くして結核を病んで苦 しみを味わった末、新しい結核薬のお蔭 で回復されました。遅れた勉強をカバー するため、統計学や語学を独学で学び、 その知識を生かして、結核疫学のパイオ ニア、国際協力の推進者になられました。 結核研究所を通して、国内では、研究の 傍ら、日本全国の医師や保健師、世界各 地の医療従事者の人材育成にも尽力され、 2000 名を超える世界中の方々から尊敬 も得られていました。一方、国際協力事 業団(JICA)、世界結核予防連合(Union)、 WHO等を通して、世界の結核対策のた <mark>めに貢献され、まさに、結核と共に歩ま</mark> れた人生でした。定年後は、結核という 各論を掘り下げて、国際保健、喫煙と健 康、エイズ対策など幅広い分野でも活躍 されました。喜寿を迎えられ「結核と歩 んで五十年(結核予防会,2003年)」 を著されましたが、それから20年、90 歳を過ぎても最後まで現役で活躍され、 外来診療も続けられました。自らの結核 では、医学部を卒業された戦後の混乱期 に発病、当時の治療の主流は安静・栄養 の自然療法で、三年近くの入院療養生活 を余儀なくされました。最初の抗結核薬 はパスのみで、人工気胸療法など数回受 けました。悪化が続き、胸郭成形術で右 の肋骨八本を切除、局所麻酔のため痛み は尋常でなかったといいます。排菌が止 まらず、翌年肺切除術を受けましたが、

当時手術を受けた十人に一人は術後の感 染等で亡くなっています。いつも死の恐 怖の中で、不安と悩みを味わっていたそ うです。その後ヒドラジッドも併用され、 排菌が陰性化し、治癒に至りました。こ の苦しみを乗り越えられたのは、生来の 負けん気と高校時代に柔道で鍛えた体力 のお蔭と本人は言います。そして生涯を 結核疫学の研究と診療に捧げることを決 意されました。回復後、1955年スエー デン留学により、国際的な視野を養われ、 結核医療だけでなく、広く公衆衛生や福 祉も学ばれました。3カ月にわたる帰国 船滞在中には、スエーデン語から「呼吸 機能訓練法」の翻訳をされ、手術後の機 能訓練という新しい考え方を日本に紹介 されました。結核という負の運命を、努 力と根性をもってプラスに変えることが、 先生の生き方でした。謙虚な人柄ととも に、卓越した語学力、会話力のゆえに、 結核分野だけでなく、当時未熟であった 日本の国際保健医療協力の広い分野で、 パイオニアのお一人として活躍されまし た。日本の国際保健医療学会の創設にも 関わり、理事長として、学問的な裏付け に基づく国際保健の発展や若い人材の育 成に寄与されました。

1988年、WHOの事務局長に中嶋宏 氏が、また結核課長に古知新氏が就任し た時、先生は執行理事として陰の立役者 でした。両名のコンビで、世界的結核戦 略DOTSが開発され、世界の結核対策 が飛躍的発展を遂げたのも先生の陰の力 があったからです。医師、研究者、国際 人、教育者として先生の優れた才覚と実 績は真似をすることはできません。しか

## 島尾忠男先生略歷

1948年東京大学医学部卒. 1949年結核 予防会入職 1955-56年スエーデンに留 学。1957年結核研究所集団検診科長、研 究部長、副所長を経て、1975-84年結核 研究所所長、1990-94年結核予防会理事 長、2000年同会顧問、2016年より同会 名誉顧問。この間、厚生省公衆衛生審議 会委員、国際協力事業団海外医療協力委 員会委員長、日米医学協力委員会委員長、 国際結核肺疾患予防連合理事会議長、世 界保健機関(WHO)執行理事、エイズ予 防財団理事長・会長などを歴任。また第 10回アジア太平洋たばこ対策会議会長 (2010)、日本国際保健医療学会理事長を 歴任した。

受賞歴:外務大臣賞(1982)、WHOヘルス フォア・オールメダル(結核対策)(1988)、 同(喫煙対策)(1999)、勲二等旭日重光章 (1996)、山上の光賞、武見賞(2016)、 WHOワールド禁煙デーメダル(2017)、 ネパール政府結核支援功労賞(2021)等。



島尾忠男先生(結核予防会提供)









①3年間の療養中の様子(数学や語学に勤しんだ。) ②スエーデン留学中より蝶ネクタイを好む。 ③1963年国際結核研修生への結核集団検診の講義。 ④1971年 WHO/WPRO結核会議(韓国)。 (写真はすべて結核予防会提供)

し学ぶべきは、90歳を越えた高齢になっても続けられた生き方です。自ら体験して来た対策の歴史に基づく論考を学会誌に投稿し続けられました。右肺が殆ど機能しない低肺機能、心筋梗塞の既往がある身体で、歩行もゆっくりでしたが、多くの会議に出席され、学会でも最前席に座られ、一言コメントを述べられました。また患者の痛みを知る医師として、患者と向き合うことを止められず、他の医師が避ける土曜日にも、外来を担当し、平日に仕事を休めない外国人患者から喜ばれました。

明治維新以降の富国強兵策の中で日本の結核の高蔓延が続いた一因は、繰り返す戦争と軍事費に莫大な予算を使い過ぎ、民生費が削られたことによると、戦争も結核医療も肌で体験された先生ならではの主張です。また日本の皆保険制度(UHC)の発展の陰には、独自の予算をもって果たしてきた結核対策があったこと、結核予算で国民病であった結核を減らせたお陰で、全体の医療費への負担が無くなり、皆保険が可能になったというのも、地域の結核医療のフィールド経験に基づく指摘です。身体的にどんなに弱

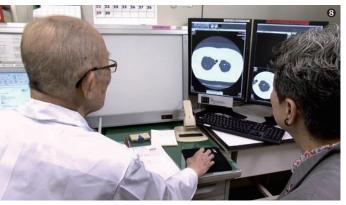
っても、痛みを忘れず患者(人々)に接 し続け、社会的な発信を続けた「根性」 から、多くを学びたいと思います。

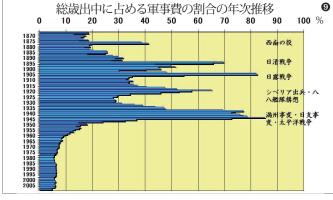
先生が遺された学会への投稿としては、「島尾忠男:60年の結核研究歴を振り返って一回顧と将来への展望一、結核87-10,669-679、2012.」、若い方々へのメッセージとしては、「日本の生きる道は、国際協調以外にない。南北間の健康問題にみられる格差の是正は、ひどい状態を経験した日本の大切な役割で、若い世代の活躍に期待したい。」があります。











⑤1988年WHO/WPRO結核会議マニラ⑥1994年国際エイズ会議横浜 シンポジウム エイズと結核(会議録より)⑥1997年プロジェクトでネパール結核患者との面談⑥90歳過ぎても患者さんの診療を続ける(⑥⑥③)写真結核予防会提供)⑤島尾忠男講義録より